

【全巻既入天香寺宗主の香泉書軒書院・空閑白】

「全巻既入天香寺宗主の香泉書軒書院・空閑白」
「全巻既入天香寺宗主の香泉書軒書院・空閑白」

「自閉症・発達障害児者の生活を 考える研修会」

平成23年2月5日（土）10:00 ～ 15:30

〈県民文化ホール未来会館 ハイビジョンホール〉

主催 : 障害者支援施設 伊自良苑

「自閉症・発達障害児者の生活を考える研修会」

専門の先生の講演と障害者支援施設伊自良苑での取り組みを紹介し、自閉症の人達がこの社会で生活をしていく為には何が必要なのか、私達はどうか支援したらいいのか、そのあり方を考える研修会を下記のように開催いたします。皆様にぜひ参加いただきますよう御案内申し上げます。

《研修テーマ》 『自閉症・発達障害児者の生活を考える』
～自閉症・発達障害児者が必要とする支援とは～

《日 時》 平成23年 2月 5日（土） 10:00 ～ 15:30

《会 場》 県民文化ホール未来会館 ハイビジョンホール
岐阜市学園町 3-42 TEL(058)296-0888

《講 師》 全国自閉症者施設協議会副会長 （社福）あかりの家施設長 三原 憲二 先生
（社福）嬉泉 東京都発達障害者支援センター 支援員 喜多 民子 先生

《プログラム》 9:30～ 受付開始

10:00 開 会

10:10～ 「支援の実際～伊自良苑では～」
伊自良苑施設長 平下 博文

11:00～ 講 演 ① 「自閉症者支援の実際」
全国自閉症者施設協議会副会長
（社福）あかりの家施設長 三原 憲二 先生

12:30～ 休 憩

13:30～ 講 演 ② 「自閉症の理解と支援～受容的交流理論の実際～」
（社福）嬉泉 東京都発達障害者支援センター
支援員 喜多 民子 先生

15:30 閉 会

《主 催》 社会福祉法人同朋会 障害者支援施設 伊自良苑
《後 援》 岐阜県自閉症協会

講演

『支援の実際 ～伊自良苑では』

障害者支援施設 伊自良苑
施設長 平下 博文

『自閉症・発達障害児者の生活を考える』

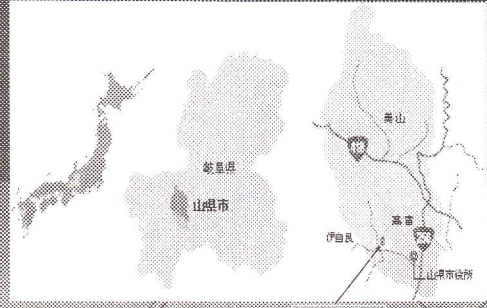
— 自閉症者支援の実際 —

伊自良苑では

障害者支援施設 伊自良苑

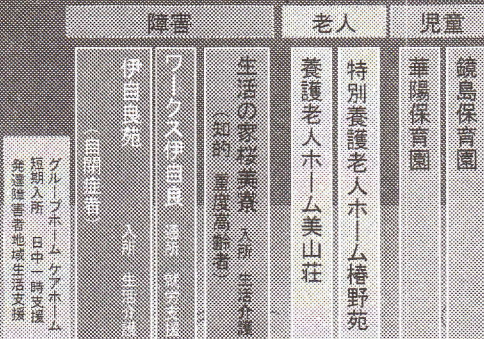
施設長 平下 博文

施設の所在地 岐阜県山県市
設置主体 社会福祉法人同朋会

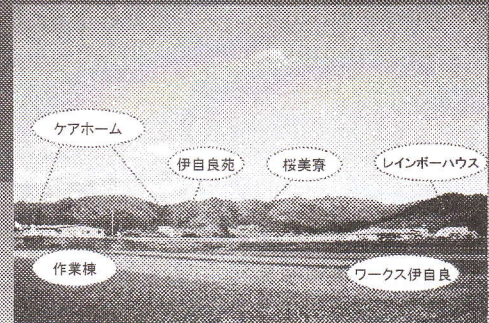


施設所在地

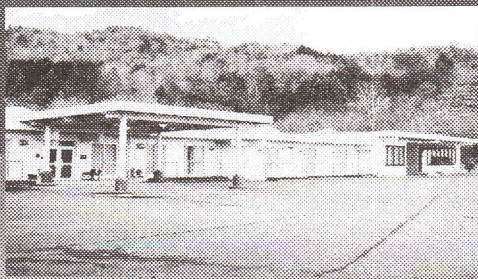
社会福祉法人同朋会総合福祉事業体制図



同朋会伊自良地域障害福祉事業所



障害者支援施設 伊自良苑
(自閉症成人施設)



利用者の状況

① 利用者の年齢層・男女比

23. 1. 31現在 施設入所70名 日中生活介護80名

年齢	16～19	20～29	30～39	40～49	50～59	計
男性	1	26	24	16	1	68
女性	1	1	9	1	0	12
計	2	27	33	17	1	80

私達の自閉症者支援の考え方 伊自良苑

成人の施設は寮（多人敷の住まい）（家庭に代るもの）としてあり、ウィークデ이의昼間は住まいから働きに出かけるのが、成人の生活の基本である。

生活を作っていく中で個々人の課題を解決していくことや、課題に取り組むことによって、生活そのものが整っていく。

同時にその過程で課題を克服することや、生き方を体得すること、学習していくことが、達成感、自信、安心となり情緒が安定していく。

全ては、現代社会で生きていくその人の「生活」づくりから始まる。

そのことが基本障害の上に、何重にも積み重なって生じてしまった「行動障害」の出現を軽減させていくことになる。

私達の自閉症者支援の考え方 伊自良苑

人との関係の修復していくことは、人社会で生きていくうえで欠かせないものです。人を介して生活ができていく心地良さは、異常なこだわりや、あるものに固執したり、耽っているより、断然心地良いはずす。

この過程は、支援する側からすれば、療育的対応であり、自閉症者本人にとっては、自己コントロールする過程である。

私達は自閉症を治そうとしているのではありません。自閉症の特性は直すべきものでもありません。

人として生きていくには、その根幹部に大変な障害（情報処理や意味理解の困難さ）を有しているのです。

私達はその大変さを認めることから出発し、誰もが通っていく人生の道程を支援するものとして、共に苦楽を分かち合ひ、共に人生を歩んでいく過程こそが立石と考えています。

私達の自閉症者支援の考え方 伊自良苑

自閉性障害を理解しようとする人（生きることを支援する人）がいて、生活する場所があって、生活する喜びがある。それが施設です。

その意味では、施設は特別な場所ではありません。

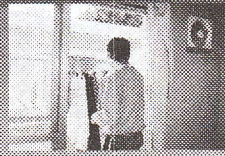
施設は、基本的な障害がゆえに、社会での生きにくさがある自閉症の人達と支援する者が一緒になって、この大変な障害と正面から向き合い、生き方を共に学び、身に付けていく場所です。

「施設を自閉症者支援の拠点として」とはそういうことです。

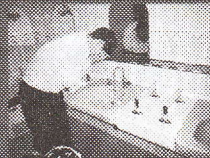
地域の中に、こうした「拠点」が増えることが、この人達と共に生きる「共生社会」を実現していくこととなります。

伊自良苑の生活

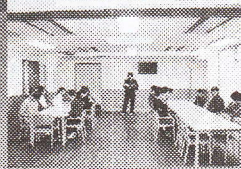
起床から～作業出勤まで 6:30～10:00



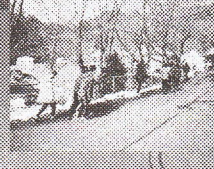
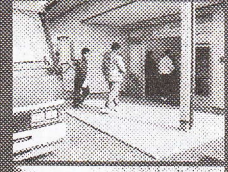
洗面



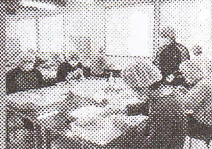
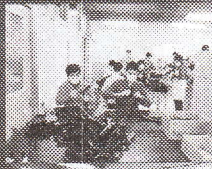
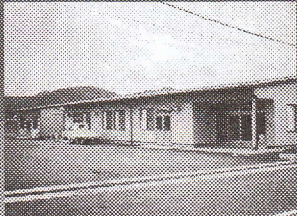
朝礼：一日の予定の確認



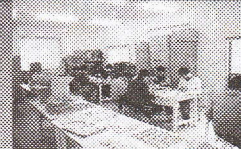
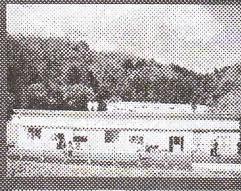
出勤



日中活動：大森作業棟 10:00~15:00



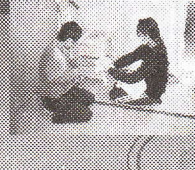
日中活動：新作業棟 10:00~14:30



日中活動：農工芸班



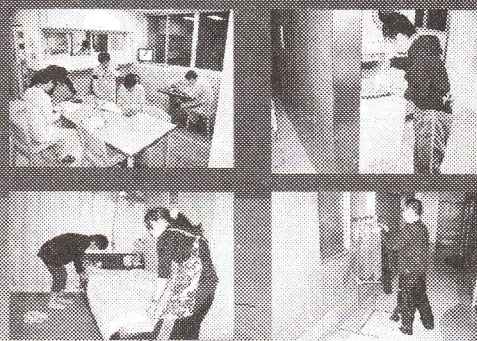
帰苑から～就寝まで 3:00～就寝



夕食：配膳・食器洗い



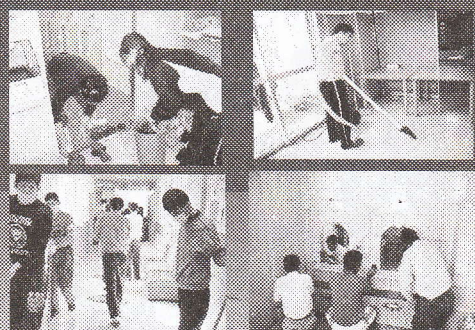
夕食後の生活



休日の暮らし



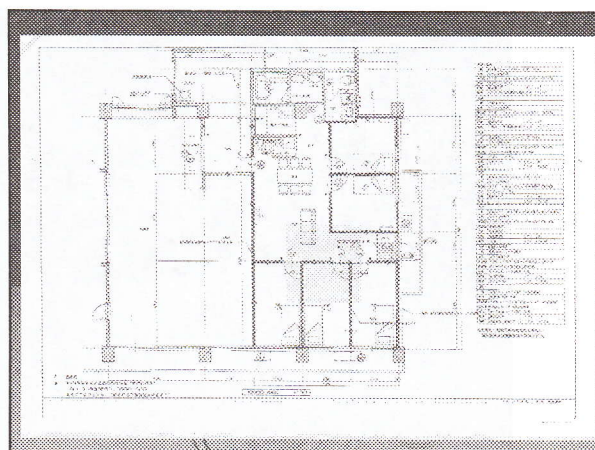
清掃

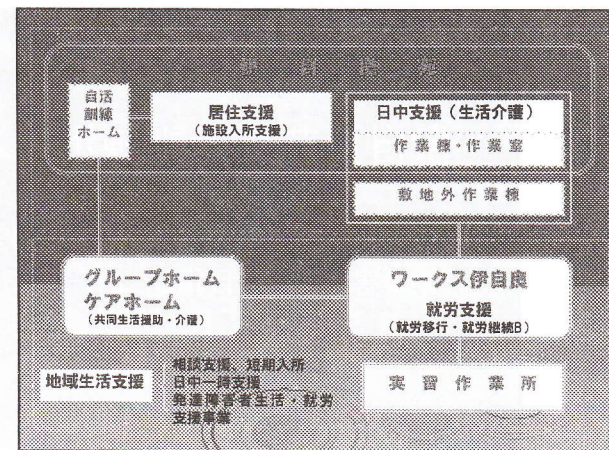
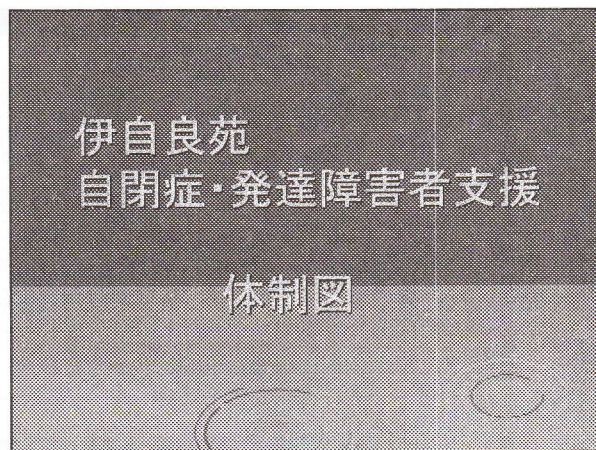
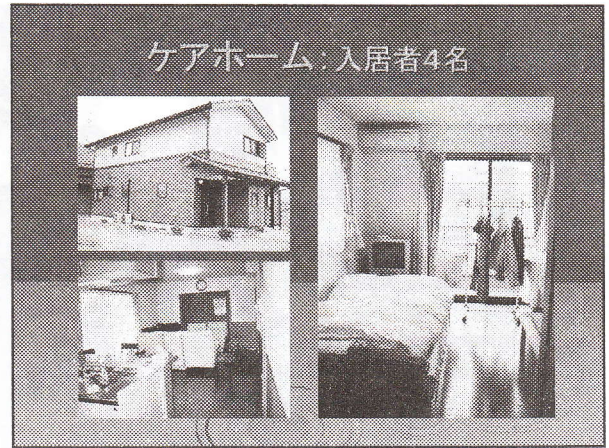
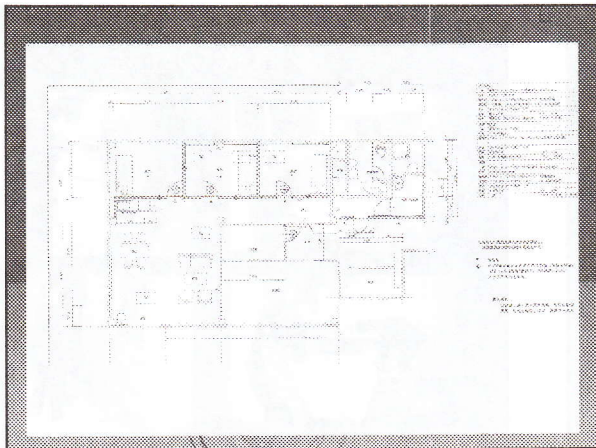


伊自良苑生活訓練ホーム

(改装整備中)

- ・ケアホームを目指した訓練ホーム 5室
- ・行動障害の改善を目指したホーム 3室





自閉症者施設(入所施設)の役割

1. 生活を保障する機能
地域での支援が限界な人達の生活を保障する役割
2. 24時間生活支援(施設療育)機能
ライフステージに応じた24時間の生活支援
将来を想像した、目標を明確化した支援
3. 地域生活支援の拠点としての役割
地域での暮らし方をバックアップしていく
ホームヘルプ・ショートステイ・就労等 生涯に亘る支援
4. 自閉症療育を担う人材の育成
24時間生活支援を通じた援助技術→専門性の育成

伊自良苑施設の基本理念

「人」として
生きていることを
ともに共感しつつ



自閉症の人達への支援

この理念の実現こそが私たちの役割であり、自閉症施設の存在意義そのものであると思います。



講 演

『自閉症者支援の実際』

全国自閉症者施設協議会理事

あかりの家施設長

三原 憲二 氏

自閉症理解と応援

—実践的ミニ事例を通して一緒に考える—

障害者支援施設・自閉症成人施設 あかりの家 三原 憲 二

<橋渡し役> <想像力>

「モノ・トラックの世界とマルチ・トラックの世界の橋渡しするためには、関わる者が、モノ・トラックの世界を尊重し、出来るだけ想像力を駆使しなければならない。」

「一つ一つの感覚から意味を見出すことができて、幾つかの感覚から同時に意味を見出すことは難しい」

(『自閉症だったわたしへ』の著者:ドナ ウイリアムズ(オーストラリア)の日本の講演で)

<準備体操>

1 施設で、いつもの風呂が工事で使えなくなりました。そこで隣の居住棟の風呂場を借りることになり、いつもの風呂場の前を通り過ぎようとした時のこと、自閉症のK君が突然自傷を始めました。(30年程前の体験)

(1) (支援者なら、反射的にまず思い浮かべなければならない) 自傷の原因は何でしょうか？

(2) (支援員があなただったら) 原因を思い浮かべた瞬間どんな言葉が出ますか？(例「マテッ!」) → ^{ほって} _{ごめんね}

2 駅の切符自動販売機の前で、困った顔で立っている人います。声をかけてあげたいのですが。

(1) 困っている人が“田舎のおじいさん”の場合、普通、どんな声がけをしますか？

(2) 困っている人が“自閉症の人”の場合は、どんな声がけが望ましいでしょうか？

3 L君は、ガソリンスタンドでの職場実習では失敗し、続いての食品加工会社では成功した

(1) 失敗したガソリンスタンドでの仕事ってどんな(性格の)仕事？

(2) 成功した食品加工会社ではどんな仕事をしていたと考えられますか？

自閉症<理解>と<応援> 議論前に

1 <理解>

(1) 「園長先生へ ぼくはマラソン大会でよくがんばりました 必ずごほうびをお願いして、プレゼントをさしあげますので、よろしく願います。」(09.12.7 A君からの手紙)

(2) 「三原さん、東京では、作業を嫌がる自閉症の人に作業をさせようとする、人権問題になるんです。」

2 <応援>

(1) 自閉症の人たちの可能性をみないか

17年前、私があかりの家に来た時、サンマが骨付きのまま出ているのを見て驚いた。大半が重度の人たちなのだがエプロンもしていない。ただ無茶苦茶に騒がしく、椅子の破損もひどかった。

(2) 地域で生きていくという視点の欠如

「三原さん、三原さん、エッチな本持ってる？」

(3) 自閉症の人たちの応援は療育で語ろう。

「あそこの施設は大変な人が多いのですね」(出入りの業者より)

(4) 自閉症には、「やさしい」のが良いか、「厳しい」のが良いか。それぞれの、良い点と、陥りやすい問題点について整理して考える。(二者択一はナンセンスであるが、「きつい」は不可)

3 <理解>と<応援>

(1) その解釈で自閉症の人たちの具体的な困り度をイメージし、応援ができるか

「ベースランニングが割合しっかりしてきた」とある小5の頃でも、『打ってから一塁へはしっかり走るがそれ以降の進塁はこわごわ走り、時にホームベースにつかないことがある』について、「ルールを理解が難しかったのだろう。」(三原の19年前のレポートより)と、当時は能力一般の問題として解釈。

4 行動障害をどう考えるか

自閉症の人たちの QOL を規定する。行動障害が激しくなると生活が行動障害に“支配”すらされる。

A 自閉症の人たちの共通理解

1 自閉症療育についての「共通理解」

- ① 親の育て方などの「心因論」によって自閉症になるのではない。脳の中樞神経系の障害が想定。
- ② 伸び伸びとか自主性に任すことより、わかりやすさ(構造化と組織化)が重要。
- ③ 一人ずつに丁寧に細かく付き合う。心の世界に入ってやりとりすることの大切さ。
- ④ 自閉症と知的障害は違う … 知的障害を伴った自閉症児は、自閉症児として育てていく
知的障害は遅れへの応援、自閉症は偏りへの応援(応援の仕方が違う)。

2 自閉症という障害の理解・「障害特性」を知る

(1) 人間関係を作る力が弱い。うまくいかない。

- ・ 人と人の関係、雰囲気、状況、表情、言葉が、刺激として複雑あるいは早すぎてうまく統合できない A③、④
- ・ 人の心の状態が想定できない(「心の理論」サリーとアンの実験) B⑧、⑨

(2) 認知の障害によって、外界からの様々な刺激をうまく統合できない。

- ・ 「モトトラック」(⇔「マルチトラック」)の世界。(ドナ・ウイリアムズ)
- ・ 「モトトラック」の世界と「マルチトラック」の世界の橋渡しの必要性 (ドナ・ウイリアムズ)
誰かを通して・何かを手がかりにして周りの環境を理解する、安定的な二者関係や水先案内人の必要性
- ・ わかりやすい環境作りの必要性、過剰な情報の整理・守る、「構造化」 B⑥、

(3) 表出不安・困難

- ・ 自分の意志を表現するのが苦手 A①、E、F
- ・ 情報(入力)過剰の時もストレスから表出不安がおこる A⑦

(4) 動作不自由

- ・ 不当緊張、反射的な行動、多動など *したくないのにしてしまう、したくてもできない、しなくてもすむ*

(5) その他

- ・ 感覚過敏、体温調節が苦手、季節の変わり目に調子を崩す、低気圧が近づくと調子を崩す

3 知っておきたい傾向

① 言葉は偏った理解のことも多いが、表面的に観察される以上のことが解っている。39

② 変更への対応が苦手である。一旦頭に入れば強い B③

③ 繰り返しには強い。(スケジュール化し安定を導く、作業に導入)

④ 視覚的な刺激には比較的良好な反応が期待できる。(刺激の工夫、刺激のコントロール)

一方で、感覚的な刺激で耐え難いケースもあることを知っておく D①

⑤ 状況理解、抽象的な概念、ルール、冗談等を含め社会的な関係理解が苦手。具体的に教える。18

B①②⑨

4 しかし、一人ずつが違う。

<密着取材> 観察と付き合いを丁寧に積み上げていき、個別理解を深める。 2 31

5 私たち自身の“生きにくさ”

B 自閉症の人たちへの 4つの応援

例えば <「いつもと同じ声かけでパニック」への応援>

(1) 原因を掴む、

- ①直接的な原因 声かけ
②遠因 今日歯痛で調子が悪い、睡眠不足、不適切な声かけなど

(2) より根本的な取り組み

- ①関係作り ②コミュニケーション力 ③生活環境の構造化 ④その他 力抜き、生活の張り合い

1 関係作りによる応援

関係作りの2つの方向 ①愛着をねらった対人関係の方向
②方向性を示唆する対人関係の方向

- ①いい関係は、いい二者関係。いい二者関係によって、安心と信頼関係を得る、あるいはまわりの世界を意味づけていく。不安に陥ってもその人を通して落ち着くことができる。ガラスを割らなくてすむ安心を提供できない担当につくと落ち着かない。無用な刺激から守ってもらえない。言葉や動きや表情や姿勢のズレをすぐに見抜いてくれて修正してもらえない。混乱を整理してもらえない。振舞い方を教えてもらえない。 184、184-2
- ② 自閉症療育のイの一番のキーワードは「わかりやすさ」。
わかりやすい関係と環境を作ることができるかどうか、それによって、プロとしての力量の半分が決まる。それによって、自閉症の人が生き易くなる。わかりやすい関係と環境では、こちらの気持ちも伝え易くなる。 10 156
簡潔に指示や説明をしてくれる人、理解のための手がかりを与えてくれる人(「あの人の話しを聞きなさい」の指示)
「頑張ろう」ではなく、どう頑張ればいいのか、その内容や手順や見通しのプログラム化を念頭に置いた応援を心がける。
マルチトラックをモノトラックに整理してくれる人・橋渡しをしてくれる人
⇔ わかりづらい関係では、混乱を引き起こし、どう振舞っていいかわからない 10
ここは手をつないで歩こう、裏道を歩こう
言葉(語調、トーン、大きさ、具体的な表現等)や動きや表情にも繊細な注意を払う
- ③うまく表現できない人、うまく環境を理解できない人のつらさ/不安・混乱・ストレスを
- a)読み取る感性・感度
b)きちんとく受け止める> 安定感、安心感、信頼感、「存在感」
気持ちと体重を一步前に出す。逃げない、避けない、愚痴らない、暗くならない、応援をケチらない。
「ヨッシ、任せとけ!」「怒らなくても大丈夫。しっかり手を持ってあげるから」と応援の声をかけられるか。安定感、ドッシリ感。 32 99
- c)ズレを修正してあげられる力量
d)行動障害の裏に隠された本音や内面を考え、行動障害の裏に隠された本来の力を引き出す。
- ④<働きかけを受け入れる力・関係>(学ぶ基礎)⇔ 拒否する、逃げる、無視する
your pace(⇔ my pace)の力をつける、人との関係の中で生きるための基礎
<働きかけをする力・関係>(主導的な力、伝える力)⇔ 避ける、ごまかす、ひるむ
- ⑤受容と主導のバランス。その中での、やりとり。方法論としての、「優しさか厳しさか」の二者択一は意味をもたない。いかに受け止め、気持ちを読み取り、こちらの思いを伝える関係が作れるか、こそが大切
- ⑥一貫性と確固とした姿勢。しっかり受け止める。(キツイは不可。多弁、お上手、不必要に刻々変わる表情、キンコンカンコン口うるさく注意するだけでは何もしない方がまだマシ)
確固とした向き合いと、かゆいところに手が届く細やかな対応
- ⑦伝えきる。きっちり場面を収める。十分ゆったりできたところで終わる。(中途半端な終わり方では、不快緊張や否定的な感情を溜め込むだけで関わらない方がまだまし)最後の最後までつきあう。ゆったりできたところで終わる。「自分でできた実感」を持たせて終わる。
- ⑧「できた」ところで終わる。(実際やらされたとしても)「自分でできた実感」を持たせたところで終わる。終

わり(「できた」)をたくさん作る。

- ⑨先回りの支援。先手必勝。状態のいい時に成功しておく。日常の場面で<付き合いきっておく>。
 ⑩その時々、状態に応じた支援の出し入れを惜しまない。
 ⑪失敗させない。成功させて信頼関係を作る。失敗を繰り返すと信頼関係が崩れる。初めての経験を成功で乗り越えることの大切さ(初物に弱い)。失敗すれば、場所や時間や方法や姿勢を変えて取り組み直す。 [67] [69] 失敗に慣れ親しまない。失敗と友達にならない。
 ⑫正しい振る舞いは明快に承認、正しくない行為には「ダメ」より正しい振る舞いを具体的に教える。「頑張ろう」ではなく、どう頑張るかを具体的に提示する。 [17] [45]

2 自己表現・アウトプットの弱さへの応援

表出不安、表現不足、行動の乖離

信頼できる二者関係、振舞い方を教えてくれる人、舌足らずを読み取ってくれる人

表現力や表現代替方法を育てる

カードの利用[26] [95]、コミュニケーション補助器、パソコン、ことばを育てる「サポートブック」の携帯

3 生活の構造化・感覚過敏・インプットの弱さへの応援

- ①<わかりやすい環境>「構造化」(TEACCHプログラムから学べる)
 物理的構造化(場所と活動の意味を一致、間仕切り、色彩などによる)、
 スケジュール・日課表(見通し、始まりと終わりがわかる)
 ワークシステム(どれだけの量をするのか、どこから始めてどこで終わるのか、終わったら次何をするのか)
 ルーティン(掃除や料理の手順書等)

視覚的構造化・視覚支援(見ただけでわかる、絵や写真や文字、スケジュール表等で示す)

頑張りの見通し 10カウント [13] [14]

環境等の変理解の応援

環境理解の「手がかり」、てだて

幼稚園で先生の指示で動くのではなく、友達の動きを「手がかり」にして動く

- ②過敏な感覚刺激やストレスから守る

刺激からの遮断、視覚的構造化(ついたての利用、座る向きの変更、グルーピングの検討)

苦手な音や視覚的な刺激を避ける。 [7] [48] [31] [46]

- ③マナー、約束事などの、抽象的なことへの応援

具体的に説明 , 振舞い方を教えておく

4 動作不自由への応援

- ①不当緊張や動作不自由さを助ける

「身体に働きかけて心に働きかける」(動作法、姫路親子体操教室)、身体と心の密接な関係

働きかけられる力(関係)と、働きかける力(関係)を育てる

力抜き 緊張部位への働きかけ スピードを落としてあげる

- ②止めてあげる、しなくてもすむようにしてあげる

反射的な行動(先行刺激に支配される行動)を事前に止める [48]

したくないのにしてしまう [6] [52]、しなくてすむ型・待つ型 を教えてあげる

こじれ、苦しみもがき、自己抑制できない環境や関係から離してあげる [142]

ことばを介して動きを作る [25]

C 支援者

1 自閉症の人達にも人が必要

—— 目が悪い人にはめがねが必要なように、自閉症の人には(めがね)人間が必要 ——

(1)「おばあちゃんは、もうすぐ死にます。」 —理解しようとするしつこさと態度— [114]

- (2)「手をもつて、手をもつて」と食事中応援を求めてきた、ショート利用のAさん 52
 —したくないのにしてしまいそうになった時—
- (3)運動会の練習時、パニックになりかけた時「けんちゃん、耳ふさいで！」と友達が応援 —とっさの対応—
- (4)「メアリーが私を人間として受け入れてくれた」(ドナ・ウィリアムズ) —受け止め—

2 応援の感性、プロとしての感度

- (1)「ちょっとしたことではないんだよ！」 原点に立ち戻る 4
- (2)「しまった！」 伝えてなかった
- (3)「ゴメン！」 食器洗いを家でさせてないのだろう 182
- (4)「アッ、そうか！」 ご飯粒だったのか 113
- (5)「コレ違うぞ！」 優等生言葉は疑ってかかれ
- (6)「怠けるな！」 実は、怠けていたのは支援員であった 157
- (7)「本当の日本語を教え！」 自然現象ではないだろう 105
- (8)「何か腑に落ちない！」 付き合いの分かれ道 106
- (9)「結局そうなんだよな！」 希望から始まった 171
- (10)「一緒に住めない！」 孤独にさせないために伝えきる。
- (11)「何か見えてくる！」 したくないのにしてしまう、したくてもできない、しなくてもすむ (療育的な言葉)

3 プロになるための「修行」

- (1)自己研修 174 (2)検索能力 175 (3)プロになるための修行 185

4 べからず集

- (1)多弁、お上手、口うるささ、キンキン声、不必要に刻々変わる表情 今の三原
- (2)行動障害をこらしめの対象としてみる
- (3)後追い。終わってしまったの叱り(先手必勝後手必敗)。先取りの支援
- (4)わたしは〇〇療法(技法)だけ。
- (5)パニックもこだわりも拒否も、変な飲み方も、「自閉症の特性」「個性」「選択の尊重」

D 自閉症の人たちへの応援と理解あれこれ(実践的ミニ事例)

「あかりの家自閉症療育のキーワード集」参照 事例をいっぱい知って理解のすそ野を広げる

E 施設支援の力

1 施設支援の基礎

入所施設の療育機能の基礎には、<クウ・ネル・ダス／デル>(食事・睡眠・排泄／日中活動という生理上・生活日課上の支援)がある。これらは相互に関連して、健康的な生活の基礎を作る。ところが、ここに躓く自閉症の人たちは多い。これらをしっかり支援できるかどうか、自閉症者施設にとっては、療育の質を左右する基本的なテーマである。 170

2 親との信頼関係、行政を巻き込む

丁寧さと、謙虚さと、専門性で、親や地域から信頼を得たい。親を孤立させない。 165 169

3 知的障害の支援ができて自閉症の支援はできない。自閉症の支援ができれば知的障害の支援はできる

4 自閉症支援は、<療育>のレベルで語ろう

<介護>のレベルで語る限り自閉症の人たちは敬遠される

あかりの家 自閉症療育のキーワード集(10年版) 抄

03. 2割/03. 11/04. 2/05. 2/06. 2/07. 2/08. 2/09. 2/10. 2 改

② 「密着取材」

<S・V> 僕は20代の時、一人ひとりに、付きまといて付きまといて「密着取材」をしていけば、自閉症の人が何を感じ、どういう風に考えているか、お母さんに次ぐ位は見てくると考えた。

③ この解釈では、自閉症の人たちの具体的な困り度をイメージできない。応援もできない！

20年近く前に、過去勤めていた児童施設におけるソフトボールチーム作りの実践についてまとめた。

その中で自閉症Z君について、「ベースランニングが割合しっかりしてきた小らの初め頃でも、打ってから一塁へはしっかり走るが、それ以降の進塁はこわごわ走る」の記録を紹介しながら、当時私は「Z君にはルール理解が難しかったのだろう。」と解釈した。

確かに、広くは能力一般の問題である。しかし自閉症の人たちとの付き合いが深くなった今、この解釈に止まる限り、自閉症の人たちの具体的な理解や応援ができないのではないかと、自らの解釈を以下のように膨らませた。

進塁をするかしないかは、守備のもたつき、ボールの位置、自分の足の速さなど、バラバラの状況を総合的に判断する能力が瞬時に要求される。自閉症の子どもたちは、そういったマルチ(多面)やグレイ(あいまい)や抽象(ルール)の世界は苦手である。それに加えて、一度進塁に失敗して、大きな声で「アウト！」とでも宣告された経験をすれば、ますます「こわごわ」と走るに違いない。

つまりそういった困難さや混乱を想定した解釈が必要になる。事実「打って一塁へ走る」というモノ(白か黒か)の世界ではしっかり走れている。

④ “ちょっとしたこと”と“ちょっとどころではないこと”

Eさんは「入浴前にいつものタオルがない」とか「買い物に行ったいつものカップラーメンがない」とか“ちょっとしたこと”でパニックを起こす。本当に“ちょっとしたこと”だから「ごめん、無かったわ！」の後手対応となる。つい“そんなことで怒るなよ”ともなる。そういった場面に最近また出くわし、改めて原点に立ち返る必要を感じた。

僕たちにとっては“ちょっとしたこと”だけど、彼にとっては“ちょっとどころではない”大変なことだという、自閉症理解の原点である、彼の困り具合に立つところから、彼の支援が始まる。

⑥ したくないのにしてしまう苦しさ

(4)泣きながら母親にレタスを食べさせる

家に帰るとすさまじいばかりに食品の買い物にこだわるEくん。ある日、買って来たレタスを、泣きながらお母さんに食べさせたという。どうしようもなく止められない苦しさを読み取れる。

⑦ 苦手な音や声

(1)姫路親子体操教室でのアンケート

「嫌いな刺激やものや場所について」11人に聞いたところ、①「叱られる時の強い口調」(73%)②「人が叱られる声」(人の泣き声)(各55%)④「騒々しい集団の声」(45%)⑤「騒々しい音」(36%)と、声や音に関するものが上位を占め、⑥に「身体接触」(27%)⑦「ピストルの音」(暗いところ)(各18%)と続いた。

(4)叱られる声に反応して皿を割る

B君は状態が崩れてくると、衝動的に皿を床に叩きつけ、割ってしまうことがある。中でもZ君のあげる大きな声・地団駄を踏む足音には過敏に反応して、瞬時にしてそういう行動が出てしまう。

⑧ 行動の乖離

(1)「ちゃんとご飯食べないと、病気になるます！」

—優等生言葉は疑ってかかれ—

分場でEさんが、昼食のメニューについて質問に来る。それに答え

ている時、突然泣き顔になって地団駄を踏み始めた。「どうしたの」と聞くと、泣き顔で「ちゃんとご飯食べないと、病気になるます。」と答えてきた。「うんそうだね。でも食べたくない時は、無理して食べなくてもいいんだよ。」と返してあげた。

しかしイライラは納まらない。その時、思いと違うことを言っていることを直感して、両肩を抱きながら「イライラしている理由は、他にあるんでしょう。言ってごらん。」と聞いた。沈黙の後「ゆで卵がいい」と静かに答えた。メニューは半熟卵であった。「何だそんなこと。すぐ作ってあげるからイライラしないで待っててください。」と伝えて、ゆで卵を作る用意をし始めるとスーと落ち着いてきた。

お母さんに聞くと、Eさんは生卵が嫌いなので、家族が生卵を食べる時には一人だけゆで卵にしてあげているとの事であった。

⑩ 母心

週末帰宅時に、母親に向かって、次の帰省確認が止まらなくなったLさん。母親は、まだ家に居たいのだろうと帰園の日を1日延ばす。それが増えていって、あかりの家でも、帰省にからんだいら立ちが目立ち始めた。

もう1日家に居させてやろうとする、母親の優しさが、Lさんを混乱させているようだ。更に、帰園が延びることによって、元々あった自宅での問題が復活し始めた。

そのあたりのことを母親とLさんに説明し、帰省は1泊2日で固定し、そのリズムは変えないよう頼んだ。

その固定によって、自宅での生活リズムができ、確認が減少し、帰省に関するトラブルは激減した。

⑬ スピードメーター

職場まで自転車で通勤していたLさんは、かなりのスピードを出すのが事故につながった。そこで、付き添ってスピードを出し過ぎないように実地指導をするが、いざ1人になると結局は元のスピードに戻った。

「1人でも自律的にスピードを守って走行するにはどうすればよいか？」とあれこれ悩んでいる時、自転車のスピードメーターの存在を知った。早速取り付けて、「(スピードは)19km/hまではO。20km/h以上はX」とルールを決め、後で実際の走行データもチェックした。それからは、実に見事にスピードを守って通勤している。

⑭ 腕時計

Nさんは、<待つ>ことが苦手で、時に不安定になり泣き出したりもする。そのため、時計の利用を思いついたが、どれだけ利用できるかわからない。そこでクリスマスに腕時計を購入し、それを持って帰宅した。

実は、帰宅すると早朝2時や3時に起き出して、母親も付き添わせて工作するので困っていた。それが家で、母親が時計を見ながら「6時になるまで、お布団に入っていてね」と説明してからというもの、目覚めても6時まで布団に入っておくことができるようになった。

一度、入浴時に時計を見失ったことがあったが必死に探した。

⑮ どう判断していいかわからない

高機能自閉症のBさんは、一般企業で10年以上働いている。何年か前からメールのやり取りを始めたが、メール文面からBさんの大変な悩みや迷いが伝ってくる。それに対して、一つずつ「こう考えればいいよ」とか「こうすると大丈夫だよ」と回答を送っている。以下、固有名詞以外は原文のままの、メールである。

「例えば、朝、通勤の時、駅前のコンビニでAさん(社内の女性)が飲み物を買って行く。その時、駅前の喫茶店の所で、Aさんが来るのを待ってくとすると、通勤の人からストーカーと思われるへんですか？」

「Cさんとお喋りしたい。なんちゅうて、喋ったらいいですか？例えば？」

「仕事の時、今日、班長の前で『あーしんど』と言ったんよ。班長に『次、しんどい言ったら死刑だぞー』と言われたんよ。冗談ですか？気にせんでいいですか？」

29 行動に言葉をはさむ

Dさんのトイレ通いは強迫的である。それは程度の差はあるが長年の課題であった。そこで一つの試みとして職員主導の下、1時間定時排尿を実施した。それ以外の「チコ」の要求は職員が止めるよう統一した。しかし、結果として強迫性やパワーを強化することになった。状態によっては10分間隔になり、「チコ」と言ってトイレに突進するようなことも増えてきた。繰り返される制止場面で、強い押し合いになったり押し切られたりもして、「止める」方法が行き詰まってしまった。

Dさんの自発的な言葉は「チコ」や「オチョー」などいくつかの単語しかない。しかし不明瞭ではあるが模倣的に「言葉」は出せるため、「こんには」などの挨拶や、「さぎょういきます」などの次の行動を言葉に出す練習を始めた。そしてトイレに突進する前に職員と一緒に「トイレいきます」と言葉を挟むように仕向けた。

そういうことを繰り返した結果、尿意のある「チコ」の時にはゆっくりと歩いてトイレに行き、尿意のない「チコ」ならば言い聞かせると自ら行くのを止めることができるように、少しずつ変わっていった。同時にこの取り組みは、「関わりにくい人」の印象を薄れさせ、対人関係の進展にも大きな効果があった。

31 ありがとう — 付き合いきる —

外出では食事がほとんど食べられないTさん、緊張のせいだと聞く。そのTさんとレインボーデー(小グループ日帰り旅行)で外食をすることになった。

外出でも父親とでは食べられるという情報を得て、何が何でも成功させたいと考え、興味のある文字を利用して二人の関係作りから始めた。初回は5分ももたなかったが、一月後には30分に延びた。できた時は大げさに褒めて喜びを共有し二人で過ごす経験を重ねた。新任としての4月には肩を触ると手を叩き落とされていたが、2か月程すると私の肩を叩いて意思表示ができるようになった。

関係作りの次は環境調査である。Tさんと二人で外出し、あかりの家にはない苦手な刺激や得意なものの把握に努めた。その結果、外食場所の条件として、他人がいない、バックミュージックのない静かな店内、暑さを避けるために室温調整ができる個室、好きな和食、油臭のない店などが浮かび上がってきた。条件の揃った店を何件も探し、やっと見つけた。そして下見をして目と耳と舌で確認した。

当日、Tさんの前に運ばれたのは多量の和食コース料理で、釜飯だけで茶碗3杯もあった。しかし、Tさんは手を止めず全ての料理を完食した。

食後、成功を共に喜んでいて、それまでジェスチャーで喜びを表現していたTさんが、曇りガラスに突然字を書いた。よく見ると「ありがとう」と2回書いてある。驚きと嬉しさから涙がこみ上げ、すぐにその字は見えなくなった。こちらこそ「ありがとう」。

32 私のイライラが伝わった！？

支援中イラッとするのがあった。「顔に出さない！怒らない！冷静に！トーンをあげない！」などと意識して支援を続けたが、苛立った気分はすぐに切り替える事が出来なかった。そんな時、直接的には関係してないDさんとふと目が合った。視線はすぐにははずれたが、Dさんの行動が徐々に雑になって、大きく甲高い声になっていった。しかし、その時は特に意識しなかった。それが何度か続いてやっと「何かあるのかな？」と考えるようになった。その時、囁託医の「帰省中の母親との関係で、母親が本人に対して悪い感情を抱いて不安定になると、それは本人にも伝わり、本人の状態も悪くなっていく」といった言葉が思い浮かんだ。心がけているのだけれど、微妙な表情や声・動きなどが伝わっているのだろうと、反省させられた。

<S・V> 言語コミュニケーションが取れない場合、非言語コミュ

ニケーションが鋭くなる。言葉がとろい者ほどシャープになる。

39 耳はダンボ

あかりの家ではショートステイ前の面接で、「お母さんにあなたのことを聞くよ。つらい話があるかわからないけど我慢してよ」とよく話し掛ける。

多くの母親は、「分からないですよ」といった顔つきをされる。「知らん顔してるけど、結構みんな耳はダンボですよ」と説明すると、「そう言えば」と思いつかれることもある。また、話を進めている時、突然不機嫌になる子どもを見て、「本当ですね」と驚かれることもある。ただ、彼らは自分勝手な解釈をし勝ちであることは頭の片隅に置いておかなければならない。

45 良いことか悪いことか聞く。そして、

こちらのメッセージをしっかりと伝える。

Cくんは、芳香剤・文具・お菓子等の買い物のこだわりが強く、毎日5千円から多い時で3万円も買込む。要求が叶わないと大暴れし、家族だけでは対応できず警察の協力を得ることもあった。精神科入院後、あかりの家の短期入所利用に至る。

利用初日、持ち上がっている問題に対してどう思っているのか、職員が尋ねてみた。

「お母さんを叩くのは？」→「ペケ」

「暴れてお巡りさんが家に来るのは？」→「ペケ」

「毎日、芳香剤を5千円も買うのは？」→「(飛びつくようにニヤツとして)マル！」

「ダメだよ。芳香剤5千円はペケ。そんなこと言ってるとお家にお家に入れなくなっちゃうよ。職員も頑張るから、Cくんも頑張ろう」という会話であった。

1ヶ月の短期入所を終えて、両親が迎えに来られた。その場に職員が立会い、母親とCくんが約束した。

(母親)「芳香剤は？」→(Cくん)「買いません、」

(母親)「叩くのは？」→(Cくん)「ペケ」。

そういった約束や帰宅後の日課表等を紙に書き、家に掲示してもらった。帰宅後6ヶ月間、買わない日々が続いている。

46 感覚過敏にしたのだ

こだわりが多くて強くて、身動きがとれなくなったAさん。必然的に家族を巻き込む。暴れ攻撃して拳の果てに父親と妹を家から追い出して、母親との二人住まい。専門家のアドバイスを受けた通所施設は一人部屋を用意し、結果通えなくなって布団にこもる。

熱い汁物は食べられない、湯船に入れない。チクチクする散髪屋に行けない。人のクシャミや咳に夜間でも反応する。周囲の会話から「ね」の入った言葉を聞くと「ねねねね……」とわめきたて、トンネルの「ネ」の字を見てトンネル前でパニックを起こす。周りの家に明かりがとまり始めると布団を敷かなければならない。便が出ないとパニックになるので親がチョコボールを置いてパニックを回避する。視・聴・触覚が過敏で、「食・眠・排泄/日中活動」のありとあらゆる場面で強いこだわりやパニックが出る。

あかりの初日に入浴はクリアするが、しばらく食事で自分や周囲の利用者のお茶や汁物をひっくり返し、ご飯などを吐き出した。非常ベルにも反応し何度か押した。ストレスからか両腕も上がらなくなった。

それも、「しなくてもすむ」関係と環境を丁寧に積み上げていって、1ヶ月ほどで熱目の汁物も食べられるようになる。「ね」にも反応しなくなる。念のため預かっていた射撃用のヘッドホン2つも使わずじまいで、預かっていたことすら忘れていた。上がらなくなっていた両腕も上がり始めて、家にも帰れるようになる。強く拒否していた父親と一緒に居られるようになって、暗く陰しい表情に笑顔が見られ始めた。

どんどん膨らんでガンジガラメにさせた彼の「感覚過敏」とは何か？「感覚過敏」を気遣って「感覚過敏」を強化し、「感覚過敏」に配慮して孤独に追いやる、そんな姿を思った。何らかのベースは想定しなければならぬにしても、この事例は、「感覚過敏」なのではなく「感覚過敏にした」のである。

52 「手を持つって手を持つって」

—暴れなくてもいいように自分で応援を求める—

作業所でうまくいかず、定期的に短期入所。食事場面で特に問題が出て、食べ物を投げたり食器をひっくり返すため、マンツーマンでつく。食器をひっくり返さないよう手を添えつつ、ゆっくり食べる応援もする。当初手を添えられることに強く嫌がっていたが、少しずつ手を添えなくてもよくなる。そんなある日、苦手な野菜を目の前にした時、「手を持つって手を持つって」と突然要求してきた。自分だけでは上手コントロールできない動きや感情を、職員に応援を頼んできた。

60 前兆を見抜く

地域療育等支援事業の相談を受けているAくんは、課題に取り組む前やその途中で、パニックになることがあるが、そこに前兆があった。

まず、①目が鋭くなり、歯を力強く食いしぼる。これを危険信号として捉える。次に②手の指を強く噛む、③太もも・頭を叩く、④甲高い声を出す、とエスカレートする。更に、この状態が続くと目の前にいる人を叩く、髪の毛を引っ張るところまで至って、自傷行為から他傷行為へと発展する。

そこで、次のような対応を考えている。

- ①目が鋭くなった時点で、次段階の手を噛んでしまう 行為を抑制するために、両手にきっちり手を添えてあげる。(手を噛む段階を避ける)
- ②手を噛むという段階に急発展した場合でも、すぐに 手を持ち、噛まないようにしていく。(噛むことで、余計に気持ちが高揚して収集がつかなくなる)
- ③手の強い動きや目の鋭さが和らぎ、こちらが手を離しても大丈夫な状態になるまで励まし、付き添い見守る。(手を離しても大丈夫は、立て直った一つの目安)
- ④落ち着き、こちらの話しを聞ける状態になってから、課題の再開をする。(中途半端な状態で再開すると、再びパニックにつながる)

67 登園拒否は自信がつけば無くなった

A君の通所拒否は長年続いていた。たまに通所しても玄関をスムーズにくぐれない。そういった相談を受け施設訪問をして応援することになった。

分かったことは、作業中の頻回なトイレ通いとお茶のみによる悪循環、途切れがちな作業がトイレ通いを誘発することであった。そういった把握の下、ある日、次のことを集中的に取り組むことにした。

- (1)うまく援助してあげられなかったことを本人に謝り、「これからA君がうまくいけるよう、きちんと応援するからね」と、これから援助する職員の姿勢を伝える
- (2)大集団の中で宙ぶらりんの状態ではなく小集団 (3名)の作業室に場所を変更してもらう
- (3)指示待ちではなく自立的に動けるための作業手順の構造化を図る。(手がかりづくり)
- (4)「お茶は休憩の時飲みます」等、約束事を文字に書いて掲示。それを場面毎に確認する。

そういった取り組みの結果、うまくいく場面が増えてきた。そして通所拒否はなくなって、玄関もスムーズにくぐれるようになった。

69 場所を変え、そこでは失敗させない

Aさんは眠前薬を服用していたが、ある時から毎日その薬を噛んで吐き出し、手になすりつける行為が続くようになった。そこで服用する場所を、吐き出し続けているリビングではなく医務室に変え、同時に初回はうまく飲めるよう(絶対に失敗しないよう)対応した。場所を変えた初回の対応がうまくいき、以降もそこでは噛んで吐き出すことはなくなった。

95 おじいちゃんの死 — 内面を引き出す、受け止める —

8月末の帰省後から、苦しうに顔を歪めながら奇声をあげ、手を叩き部屋から走り出すこと事が続いた。Gさんに言葉は無いが、

思いをカードで選び出すことができる。そして「お爺さん」に絞り込めた。

お母さんに聞くと、8月にGさんを可愛がってくれていたお爺さんが亡くなり、それを帰省時に知らされたらしい。どうもそのことらしい。ある程度は時間が解決してくれると思ったが、1か月経っても抜け出せない。

ここに至って、Gさんの辛い思いを徹底的に吐き出してもらって覚悟を決めた。30種類ほどのカードを作った。聞いてみると、「お母さん」「お父さん」「お爺さん」のカードを何度も手渡してくる。お爺さんの思い出も聞くと、「おじいさん」「お風呂」「テレビ」「寝る」のカードを渡してくる。それぞれについて、「おじいさんとお風呂入ったの?」「テレビ見たの?」と聞くと、その度にガッツポーズで返してくれた。「楽しかったんだね。いい思い出を残してもらえたね。」と、Gさんの思いを汲み取った言葉を返していく。

そんなカードを使った会話を、30分ほど繰り返した。その後で、心を込めて、ゆっくり、お爺さんはもう亡くなって、家に帰ってもいないことを伝えた。何度も繰り返し、伝えた。そして、最後に一緒に目を瞑って手を合わせて静かに祈りをした。翌日からイライラした様子はなくなった。

96 キライでは見えなかった

四年目にして眼鏡を取られた。夜間に失禁され、トイレ誘導すると再入眠しない。一年目の方が関係良かった。

ある日の夜勤も中々寝ない。「なんでネーヘンのヨ!」と感情だけで怒った。その時だ、いつもは怒られるとのけ反ったりするNさんが、すり寄ってきて静かに泣いたのである。ハッとして、「でも寝れないのよ! どうにかしてよ!」というNさんのどうしようもできない苦しみを実感したのである。

それをきっかけにNさんとの関係を見直し始めた。大橋さんというだけで、指が動くだけでイライラしている自分に気づいた。

キライだと先に進めない。好きになろう、そう決めた。私はNさんと担当のHさんとの間に流れる空気が好きだった。そこで、担当の真似をして抱きついてみた。肌から伝わる温もりで、スーと落ち着いて、素直になっていく自分を感じた。次からイライラしそうなると、私がイライラしないために抱きついた。

私の気持ちの変化だけで、夜間眠れる時間が増えてきた。今までは目を閉じるかどうかばかり見ていたマッサージも、どこをマッサージすれば気持ち良さそうにするか、目がトロンとなるか見られるようになった。

振り返ると私のイライラが彼女の多動を助長していた。怒っている人が横にいたら寝られないのは当たり前だ。今では、どれだけ早く寝かせてあげられるかという思いに変わった。マッサージで眠そうになっていく彼女の姿が嬉しい。

99 慰める・受け止める — 気持ちを思いやる —

Bさんは、通所施設と家庭で、強いこだわりから自傷や器物破損が激増し、緊急のショートステイになった。

しなくてすむ関係と環境の中で徐々に安定し、帰省日を組み込んだ。ある日、2泊の帰省を終え、あかりの家に帰ってきた時、廊下でスーと涙を流した。イライラした様子はないし、帰省中も安定していたという。

そこで、静かに涙を流すBさんの思いを読みとろうと頭を巡らせた。「また、あかりの家に帰らなければならぬ...いつまで頑張ればいいのか...」と考えた。そこで、「Bさん、Bさんが頑張ってきたことはみんな分かっているよ。Bさんのことは〇〇さん(担当支援員)がちゃんと教えてあげるから、心配しなくてもいいよ。」等、いろいろ慰める。Bさんは鎮きながら静かに話を聞く。その後安定した穏やかな状態が続く。

105 彼女の意見を聞いたの? 個室に“なった”の?

家庭では一人で寝ることがなかったSさん、個室化推進に伴い一人部屋になる。個室化工事中にも部屋移動が2度あったこともあり、「お部屋交換」「お布団持っておいで」という言葉が頻繁に出るようになる。支援員と同じ空間で寝ていた頃にはほとんどなかったツバ飛ばしの跡が、居室の壁一面についていた。

SVIに聞いてみると、「彼女の意見を聞いたのか否か。彼女の考えをアレコシ想像してみたのだろうか否か。“個室となり”という表現は自然現象のようだがそうではない。“個室にした”のだ。」と返ってきた。そうだった。支援員は「大人なんだから一人で寝なさい」と一方的に押し付けていた。夜間目覚めて支援員室に来て、「寝なさい」と追いつたりもした。今から考えると、Sさんの気持ちに全く寄り添っていなかった。

今は、就寝時に時に足などをマッサージする。しかしまだ、布団に入ると指や口の多動の誘惑に負けそうで、入眠までは、直接・間接、Sさんの中に支援員の存在が必要とされる。状態によっては支援員と同じ部屋で寝るなどの応援も必要となる。一方で、お互いに確認しやすくするために開けていたドアを閉めたり、ベッドの位置を変えたりして、少しずつステップアップしている。

1106 勝手にパニック、付き合ってパニック、うーんと付き合ってパニックが減った

V君はフラッシュバックのようなパニックがある。(それを上で「勝手にパニック」とした)突然夜「お母さん、〇〇行かへん」と大声で叫び始める。それは、何かのきっかけで起こるのだろうとあきらめていた。ところが担当になって取り組みを始めたすとパニックが増えた。ゆっくりペースのV君を追い立て過ぎたのかと感じ始めた。そうして、昔のことを言っているけど、パニックには現在の原因があるように思い始めた。

今までパニックの時には、「そんなん叫んでも伝わらんで。パニック終わり。」と、制止していた。それが、原因があるような気がしてから「V君、しゃべれるんやから、何があったんか、ゆっくり話してみ。」と、堅く握った指を開くように握ってあげて、時間をかけてパニックに付き添った。

そしてだんだん分かってき始めた。洗濯した靴下が片方なくなったとか、寒いから下着を長袖にするように職員に言われたとか、そんなことが引かかっているらしい。あたっていたかどうか、密かにつけたパニック記録で見極めた。「ああ、あのやりとりで解決したのか、じゃあ原因はシャツだったのか」と。

<S・V> この中で一番重要なのは「付き合ってパニック」のところ。一見悪くなるから、そんな余計な介入しない方がいいよという議論が必ず起きる。このパニックを前にした時、引くか、次に踏み出すか。より本当の落ち着きは、次に乗り越えたところにある。

もう一つはフラッシュバック。フラッシュバックと捉えたと昔の傷ついた話になって、それなら温かく見守ってあげましょうとなる。昔のことだから今の私(支援員)の問題ではないということになって、手を打つ必要がなくなる。しかし、この事例では、フラッシュバックと言いつつ現在に問題があると思いついた。何故か? 性格なのか人生観なのか自閉症観なのか、もう少しはっきりさせた方がいい。そして、現在に原因があると思えない人と、思える人がいるという事もポイント。その差は何だろうか。

1113 ああこれだ! 怒っている理由は

ショート利用のBさんが食事中突然怒り出した。原因はわからない。あれこれ思い巡らせて対応するが上手くいかない。ふと周りを見た時、斜め前の人の頬にご飯粒がついていた。「ああこれだ」とわかり、ご飯粒を取り除きながら「Aさん、この人の頬にご飯粒が付いていることで怒ったのね」と話しかけると、すーと怒りが収まった。

<S・V> 上手くしゃべれない彼らが何かをした時、その意味は一体何なのか、それへの「感度」は重要。「感度」はプロとしての力量の必要条件。「何やってんだ、困るよ!」じゃあダメ。その感度が低い職員は今から辞めて欲しい。あるいは色んな仮説を持って、何日か経つうちに「あっ、あれは、そーだったんだ。きつ!」という風な考え方、感じ方ができる人ではないと出来ないんです、この仕事は。常に、この感覚は磨いて欲しい。

1114 「おばあちゃんは、もうすぐ死にます。」

言語表現の不十分さを代わって表現してあげる

Bさんはおばあちゃんが大好きで、時々一人で泊まりに行く。そ

の翌日は表情もいい。

ある日「おばあちゃんは、もうすぐ死にます」と独り言のように言う。聞いていた仲間が声をあげて驚くと、更に繰り返した。気になって、連絡ノートにそのことを書くと、「実は家でもそのことで困っていて『そんなことを言ったらいけません』と注意している」と返事が返ってきた。

次の日も、「おばあちゃんは、もうすぐ死にます。」の言葉は続いた。そんな時ふと思いついた。Bさんに、「『おばあちゃんは、もうすぐ死にます』と言ったのは、おばあちゃんだったの?」と聞くと、「はいーつ」と言いながら、嬉しそうにピョンピョンと走って行った。

どうも、大好きなおばあちゃんが「いつまでBちゃんの相手ができるのかなあ。おばあちゃんの方が先に死んでしまうからなあ」と言ったらいい。そのことをお母さんに知らせると、「思いもよらなかったが充分考えられる。」との返事であった。次の日Bさんに、「おばあさんが死んだら悲しいから、言うのはやめよう」と話した。こだわりっぽい言い方はその時を境に無くなった。

1142 タクシーに乗ったら眠り始めた

Mさんは帰省すると寝づらい。TVから食べ物までさまざまいばかりのこだわりが睡眠を邪魔する。ある帰省時「タクシーに乗ったら寝始めました」とお母さんから話があった。さまざまいばかりの、こだわらざるを得ない心と身体の状態。その時の頭の中の状態、身体のカミ等、どうしようもなく大変な状態が推察される。これでは眠れない。その場から離れて、タクシーの中で眠った。あかりの家では睡眠に問題は無い。

1157 怠けるな!

ケーブル解体作業に従事しているKさん。未解体の銅線を「みんな用」に中央に「山積み」していたが、突っ立ったままの状態が目立った。職員の声がけも、つい「頑張れ」といった「怠け者」への声かけとなる。

観察を進めていく過程で、職員が10本程度を選んでKさんの作業台に置いてみた。するとKさんは「怠け者」どころか誰よりも能率良く、集中して全部を一気に仕上げてみせた。現在は、作業班のエース的存在である。

実は、「怠け者」ではなく「分かりにくさ」であった。そのキーワードは、①「山積み」ではなく「小分け」であり、②中央に山積みした「みんな用」の銅線ではなく「自分用」の作業台に置かれた銅線であった。

ちょっととした部分に「分かりにくさ」があって、そこを応援してあげると、「怠け者」から「エース」に生まれ変わるのである。問題はDさんではなく、支援員側にあったのである。

<S・V> (ある事例に対して)本人が混乱しているわけだが、職員が混乱させていると考えて付き合った方が、先が見えてくるように思う。

1165 父親を軸にする

外来療育のW君は、母親を見た瞬間に髪の毛を掴みに行ったりする。母親は怯え、できるだけ顔を合わさないようにするしかなかった。父親に対する攻撃もあるが、ある程度抑制が効く。そこで父親を軸にして、母親との関係改善を図ることを考えた。

まず、あかりの家で作業課題を利用して、父親とW君との関係を強化していった。次に、母親を見ても掴みかからないために、父親と私が付き添う形で、母親とW君を近づける段階に進んだ。母親が声かけなどして関係的な距離を縮め、空間的な距離も少しずつ詰めていった。最初は距離が縮まると髪の毛に手が伸びていたが、手を添えてW君の手が伸びないように応援をしていった。そのようにして、段々手が伸びることが減少していき、母親も不安を抱えながらも少しずつ自信がついていった。

次は、家庭(私不在)における関係作りであるが、これまでの取り組みによって父親の存在で母親を見ても掴みかかることが次第に減っていた。そして仕上げは、W君と母親の二人だけの場面になる。失敗をしないように、W君の状態が良い時を選び「掴まなくて済んだ」という経験を積み重ねていくことの大切さを話した。そういった経験を積み重ねていくことで、母親も自信が付き、またW君

も安心できることで、今は何とか一緒に過ごせるようになった。

<S・V> 日本の社会は母系社会で父性原理が弱い。だから家庭内暴力が出やすい。思春期に母子関係が上手くいかなかった時に、お父さんが登場してきて、世の中の原理原則のようなものをポンと抱えて入ってくると、母子関係が父母子関係に変わって、家庭生活が上手くいったりする。

169 親との信頼関係

Eさんのごだわりは相当に激しく苦しい。集中的な取り組みで、あかりの家でのごだわりが改善し、表情も和らぎ始めた頃、帰省時の家庭で全く別の大きな問題が出始めた。そして、今までに増して家族を困らせ不安が募った。しかし、職員が家に応援に行き、親を困らせた問題が改善するにつれ、当時、あかりの家での取り組みに抱いた「疑念」(と書かれている)が、次第に消え、前向きの気持ちに変化していった。

<S・V> どんな方法をとる場合でも、我々プロは、親と意見が同じところから利用者との付き合いを始めなければならない。いくらいい方法だと思っても、親が反対だと絶対上手くいかない。薬でも、親がダメだと思ったら、どんな薬を飲ませても悪いことしか起こらない。お母さんの状態が悪くなると、運動して彼らの状態も悪くなる訳だから。

避けなければならないことは、帰省後の状態の崩れを親のせいにしてしまうことだ。我々が崩れを親のせいとし、親があかりの生活を不憫に思い、我々と親とがバラバラだと間に挟まった自閉症の人の状態は必ず悪くなり、その状態を三者が諦めて努力しなくなってしまふからだ。

親は我々以上に苦勞している。それを超える苦勞をし、結果を出さない限り、親たちはプロを信用しない。小さい時からプロは役に立たず、混乱させられるようなことばかり言われ、親の努力の結果が施設入所な訳です。逆にそれを突破して親に信頼してもらえば、連携することが可能はずだ。むろん「難しい」。尋常な苦勞では、今のままだ。これまでの人のしなかった程の苦勞をして、突破せねばならないのだから。

170 短期入所による行動障害改善の背景

- ①わかりやすく構造化された日課や環境や関係の中で過ごす。(分かりやすさ、見通し)
- ②問題を引き起こしている環境や関係から離れる。(しなくてもすむ環境や関係)
- ③集団的日課の流れに乗せられる形での健康的な生活の回復
- ④安定的な日中活動による食事・睡眠・排泄など基本的・生理的な生活力の回復
- ⑤疲れきたった本人と支援者の、体力や気力の回復
- ⑥自閉症の理解と専門的な療育的支援
 - i) 成功体験
 - ii) 支援者の主導メッセージ
 - iii) 支援者の感性
 - iv) 直接支援

171 希望から始まった

「感覚過敏にしたいのだ」で触れたZさん。ごだわりやパニックでがんにがらめになって、通所施設に通えなくなる、父親と妹を家から追い出す。母親との二人住まいになって、母親の肩を噛んだり暴れたりがエスカレートし、県外からの短期入所となった。

来所初日、職員3人に困まれて、父親と母親それぞれから「とも一緒に生活できない。あかりの家で頑張らせて欲しい。元気になったら迎えに来る」と言ってもらって、そのまま短期入所に入る。初日から家での問題行動はかなり改善されるが、ストレスからか両腕が上がらなくなる。1ヶ月を過ぎる頃、食事等の問題が激減して、表情は幾分緩んだ。しかし相変わらず表情は暗く硬い。腕は未だ上がらない。

しかし、転機が来た。それは、帰宅への希望であった。2カ月たって、状態も落ち着いてきたため両親との面会を予定した。この面会は絶対に成功させなければならないと、慎重に丁寧に準備した。

家族との思い出写真を送ってもらった。両親から「元気ががんばって嬉しいよ。会いに行くよ」との電話もらった。

初面会の日、本人からも両親からもビュンビュン緊張が伝わってくる。しかし、大きな失敗をせずにすませ、「また会いに来るよ」と言われ「がんばる」と応えた。表情が緩み笑顔になった。それから、腕もウソのように上がるようになった。そして緊張の2泊3日の一時帰宅を迎えるが、何とか大きな問題を起こさず、満面の笑顔であかりに帰ってきた。

174 自己研修

<S・V> 研修の最終目標は「自己研修できること」

<S・V> 糸賀先生は事務屋なのです。ただ先生は、知恵遅れの子どもたちから学ぶ力を持っている。学んで力量が上がっていく。それが「子どもたちが育つ時は職員も育つ時だ」という言い方になっていく。

僕の講演を聞いてもほとんど意味がなくて、彼らから学んだ時に、本当に積み重ねのある学び方ができる。そういう積み重ねというか、自己学習できる職員になりたいものです。

175 検索能力

このキーワード集は、実践を煮詰めて点にしたミニ事例集である。この点は自前の実践であり、多くは目の前の利用者から学んだものである。

“中堅以上となると、キーワードを自分の頭に溜め込んでいき、瞬時に必要なものを引っ張り出して使う。そういう検索能力を上げていかなければならない。”

<S・V> 特に、中堅以上となると、どういところが共通していて、どこがその子独特のものなのか、種分けしながら自分の頭に溜め込んでいき、瞬時に必要なものを引っ張り出して使う。そういう検索能力を上げていかなければならない。

184 新任職員によって調子を崩す

Aさんは、職員の異動、とりわけ新任職員で調子を崩し易い。泣く、唾を飛ばす、向かっていく、尿失禁する。興奮しやすくなり、眠りづらくなるのが目立つ。

きっちり彼女を守りきれない故の行動の乱れであり、職員側の問題である。いずれにしても、新任職員の成長をどう応援できるかがである。

<S・V> ぼくが一番気になっていることのひとつが、担任や担当の変更、部屋や作業班の移動等に関し、彼ら一人ひとりに(ちょうど、目が悪い人に眼鏡が必要のように、自閉症の人には眼鏡に代わる)眼鏡人間が確かに保障されているか否か、そういう観点を持っているか、強く意識して付き合っているか、ということになる。

185 プロになるための修行

新任職員が、D君の食事場面で何年か振りのパニックを起こさせた。若い職員は、自分の言葉がけから引き起こされたパニックに落ち込んだ。

そういった時、パニックや関係を定着させないために、次から関わりを避けるやり方がある。しかし、福祉生活現場にそんな余裕はない。同一職員が、場所や場面や方法を変えて関わる。言葉かけでつまづいたのであるなら、次は、「一寸聞いて」と間を置いて本論に入るとか、低い声で、ゆっくり、伝わりやすい言葉で話すなどの配慮が必要となる。そういったことを話した。修行である。

<S・V> 本を読んで勉強しても付き合い方の力量はあがらない。結局失敗しながら痛い思いをしながら、彼らと付き合いながらいろいろなることを気付かされながら自分の力量を上げていくしかない。

「自閉症」本人の声

A 『自閉症だったわたしへ』 新潮社 ドナ・ウィリアムズ (オーストラリア)

- ①自分の意見や考えや感じたことを表現するのは怖い
- ②人々は皆、敵に見えた。そして皆、わたしに武器を向けているように見えた。
- ③人間にはなじめないというのに、物ならば、自分の一部のようにまでしてしまうのが、うれしくてしかたなかった。
- ④こうして物を整理していると、わたしは自分も安定した気持ちになってくるのだ。
- ⑤人の声のトーンがいやでたまらないことがある。
- ⑥物理的な衝撃などを除けば、自分の体に対する知覚がほとんどなかったのである。肉体的な接触に対する恐怖は、わたしの場合、死への恐怖と同じものだった。
- ⑦本当に認知障害があるようなふるまいをするが、それは外から入ってくる情報の多さに対応することができなくて、激しいストレスのために自分をシャットアウトしてしまうからなのである。
- ⑧メアリー（精神科医）がわたしを受け入れてくれることこそが、やる気をかきたてる力の源となった。わたしを人間として受け入れてくれた。
- ⑨わたしの行動を矯正するという名の下に行われた、様々な虐待の場面がよみがえった。そうした訓練や矯正に従ったが、それ以外の場面では、26年間わたしはわたしだけの世界を保ち続けて来たのである。
- ⑩一番のポイントは、親や先生やカウンセラーの観点によって、その子の個性や自由を押し潰してしまわないことだろう。その過程は決してなまやさしいものではないはずだ。闘いに次ぐ闘いであり、そのたびごとにひとつずつ武装解除して行く、すさまじいばかりのものなのだ。

B 「自閉症の才能開発」 学習研究社 テンプル・グランディン (米国)

- ①絵で考えるのが私のやりかたである。誰かに話しかけられると、その言葉は即座に絵に変化する。視覚化できない「下」は、避難訓練で学校のテーブルの下に隠れた様子を反射的に思い出す。
- ②「平和」という抽象的なものは、鳩など象徴的な形に結び付けて視覚化する。
- ③自閉症者は変化に弱い。高校から大学に進むという人生の転機を実感するために、現実の入口や窓や門何度も出たり入ったりして実感確かめた。
- ④3才のころ、しゃべることが出来なくてフラストレーションを感じて、何度もかんしゃくを起こした。言われたことは分かるのにどうしても言葉が出ない。叫び声を上げる以外意志を伝える方法がなかった。先生をかんだ日もある。
- ⑤1人にしておかれると、宙を見つめ催眠術にかかったような状態をみせた。騒音に耐えられなくなると、ロッキングやスピニングに逃げ込んだ。ロッキングは神経の高ぶるのを抑えてくれた。ロッキングをするほどロッキングが必要になった。
- ⑥注意を奪うような風景や音から保護されると、未熟な神経組織は話し言葉を認識出来るようになる。
- ⑦14才で思春期に入ると、神経発作がはじまった。場面恐怖にさらされる生活が始まった。こっぴみじんになりそうな発作を引き起こした。夜中に心臓が破裂しそうになって目が覚めた。
- ⑧自閉症のために起きる恥ずかしい状況を避ける助けとなった過去の経験やテレビ番組などが山ほど記憶の中にたまっている。これを理論的に決断を下す資料として使う。ある行為は人を怒らせるということを経験から学んだ。初期には誤っていることが多かったが、今では決断内容は進歩している。記憶に以前に増してたくさん情報がたまっているから。
- ⑨ビジネス関係は記憶で容易に学ぶことが出来るがデートは難しい。人との複雑な関わりの中で、相手のところを読む感覚がほとんど無いからである。最初は、電話でコンタクトを取る方を好んだ。そのほうが、相手の表情やしぐさに囚われずにすむから、楽であった。

C 小林隆児（精神科医） 講演の記録より

- ①人の話しは、ただワアワア言っているとしか聞こえなかった。
- ②6歳から7歳くらいにかけて話がわかってきた。分かって来たら自分が落ち着いて来た。

D Bemporad（精神科医）の自閉症からの聞き取り

- ①それは耐え難い騒音とすさまじい匂いの世界である。生き物は特にそうである。
- ②教室では自分が粉々になってしまいそうな、そういう非常に恐ろしい経験をしていた。
- ③ほかの子どもが自分に危害を加えるのではないかと、そういう恐怖心がいつもあった。

E だっこ法研修会（神戸） 筆談現場にて

・（そんなに思っているのならどうして話してくれないの）「僕の心は弱いからだよ」

F Aさん（兵庫県）の言葉

・（どうして自分の気持ちを話さないの）「（言いたいことがあっても）ことばが出ない」

G ウェンディ・ローソン（オーストラリア アスペ当事者）

・「問題度の低い」行動に気づき、それがパターンとして確立する前に早く介入してください

講 演

『自閉症の理解と支援
～受容的交流理論の実践～』

(社福)嬉泉 東京都発達障害者支援センター
支援員 喜多 民子 氏

自閉症の理解と支援

～受容的交流理論の実践～

東京都発達障害者支援センター 喜多良子

交流とは

人によって納得する、
人によって慰められ、
励まされて頑張れる、
苦しい時に人に助けを求め、
人に理解されて心が安定する
理解してくれる人の求めに応じたいと思う
→人と共に在るといふ心の働き・・・交流

交流ができればさまざまな問題を解決し、自分を発展させることができる。
できなければ、いかに能力が高く、大学を出ても仕事ができても、ひとたび不適応が深刻化し、困難な状況に陥ったとき、人がそばにいても、人が支援しようとしても、支援することができない。

1. 自閉症にみられる困難さ

交流ということがとても難しいのが自閉症という障害であると考えられる。それは自閉症に特有の困難さと関係している。

機能的な障害→刺激に動かされてしまう、人からの刺激の意味が分からない、言葉をうまく使えない、人に伝えられない、感覚の過敏さ、状況がわからない、全体を見ることができない、変化についていけない、対応することが困難である・・・

→人の介入を受けられない、不安や緊張が解消できない、自分の世界に入りがち

➡️愛着関係の遅れ ➡️外部からの過剰な圧力

➡️非社会的な生活形成 ➡️困難な社会生活

2 受容的交流とは

内的世界への注視

↓

心の奥にある衝動・感覚・情緒・快感・不安・緊張
・抵抗・・・など

↓

共感的理解・言語化しつつ→課題場面を通して、相手に求め、相手の中にある健康的な心の動きを、支持していく。その相互作用の中から自発性が発揮される。

3 交流における関わりの原理

- ① 刺激の整理とわかりやすい態度・言動
- ② 安定した好意
- ③ 圧力や緊張を感じさせない気配り
- ④ 相手の気持ちを理解して確かめる
- ⑤ 本人の主体性を尊重する 表面的な行動化を焦らない
- ⑥ 安易に制止しない 抑制的意見を出さない
- ⑦ 相手への非難または批判は避け、客観的に解説

4 まとめ

一口にいえば、
人としての当たり前の関わりをしていくことである。
しかし、それは簡単ではない。
・相手の立場、気持ち、置かれている状況への深い理解と思いやりが大切。そのためには、障害ということへの的確な理解を持つことが必要である。
・私たちは自分たちが作り上げてきた一般通念や人への見方を安易に当てはめて、相手の行動を解釈したり、あるいはそれを嫌って直そうとしがちである。また、同時に相手の分かりにくい行動のゆえに、相手の心の中にある自分たちと同じ気持ちも見逃しがちである。それを戒めることが大切である。

石井哲夫先生の（保育者養成のための）講演より （一部抜き刷り）

受容的交流理論において、「受容」というと批判されるのですね。例えば、障害児を受容するというと、「何でも好きなようにやらせて、おしっこでもうんちでも、させて、禁止はしないんじゃないか」なんて言われるけど、そんなばかなことはないのです。

要するに必要なことは、人間同士のつきあいで、何かそこにかかわり合いを持つとするなら、相手の内的な世界に注目する必要があるのですね。そのことによって、相手に、自分が理解されているという感じができるのですね。そのことで、自分を理解してくれる人への信頼ができる。保育士もそうですよ。そういう養育者と子どもとの相互作用によって、信頼が生ずるわけですね。そして、それによって次第によい、というか肯定的な自分というものが作られていく。自分の司令塔である自我の働きというものが、人とかがかわることから作られているのだ、ということをよく知っていただきたいと思っております。

それから、受容的交流という考えとはどういうものなのか。行動分析の立場の小林重雄君と議論した時に、「受容というけど、課題って言う行動介入があるじゃないか」というような意味のことを言いましたが、受容的交流と受容の違いは、課題という交流場面を作り、人間関係の状況を変えていくという点にあります。しかし、基本は受容なのです。課題場面でもその中で、相手の選択を重んじるということであり、受容というのは相手の自発性の尊重です。自発性という、人間の本性としての心身の働きを進める力というのはあるのですね。交流の場面に相手に課題を出すことで、少しずつ困難な状況に直面させるわけです。そこで、力を湧き立たせるコピーングが生じてきます。自発性はこれと対応しているのではないか。それは外的な介入課題を適切に選択し合っただけかかわり合う、というような交流を入れて受容的交流としたわけです。

ですから、受容というのは課題における選択し合いによる交流から人間関係の信頼が生じ、そこから心理的健康状態が進んでいく。そして、交流することによって、子どもの探究心、向上心が発揮される。これを今、子どもの仲間の発達障害関係の関係者が注目してくれるようになってきております。

私自身が受容的交流の中で支援者として考えなければならないことは、介入ということなのです。子どもにかかわっていく場合に、子どもの心理的な世界に私たちは介入しているのだ、その場合に介入過程として、どう見取るか、見分けるか、見立てるか、関わるか、振り返るか。振り返りとは事後評価ですね。これを私自身が、今年の学会に発表して本に書きました。それで、自らを振り返りながら、子どもと保育士とともに事故認知、事故統制が進むようになったと思います。そういうことで、こういう受容的交流理論の発想から介入過程を考えたのです。

私は保育士に子どもと向い合っただけで欲しい。どの子どもも個性があり、まっすぐに生きていけると見ているか。すぐ「だめ」って、口で叱った

り、抑えたりしていないか。心配りができて、まめに関わっているか、やわらかく子どもに自信とやる気を育てているか。やわらかな関わりとは、感覚的な関わりなのです。意外と皆さん、理屈はよく言うのですけれども、感覚の世界のことは言いませんね。自閉症の子どもと関わっていると、これがいかに大事なのかということがわかる。

それから、集団の場合に、集団をまとめるとか、一緒にやらせることだけを考えている。本当になんでこんなことをやらなきゃいけないのって。あなたたちは、いわゆる子どもを自衛隊に入れるとか、マスゲームをさせるために子どもを育てているのではないのだから、すべての子どもの立場や気持ちを見届けながら、生かせるようにして欲しいのです。みんなと一緒に言えなかったり、動けない子どもの手助けや思いやりをすることを進めていますか。これは、保育士が自分で手助けなどをやって子どもたちに見せなければだめです。そこから他の子が「ああ、そうするものだ」とわかる。これは集団の中でしかできないのです。家庭ではなかなかできない。ですから、集団で助けあいながら活動していく機会を多く持つような工夫というものを心がける。一人ひとりのよい点や、かわいらしく思っている点をクラスの子どもたちに話すようにしてやる。「だめ」ということばかり言っている人はダメ。「あの子はだめな子だ」なんていうふうにレッテルを貼らないでください。「みんなすばらしい、いい子ばかりです。」と思えないと共生社会は成り立たないのですね。